

地獄の生活の場であった。

初めて入る炭坑。斜坑を歩いて下りると、木の杵が折れ、ボタがボロボロと落ちたり、水たまりがあったり、恐怖この上なし。八時間働いて上がる時は、空腹でめまいがして、倒れる者数知れぬ状態であった。

黒パン三百グラム、粟や燕麦のお粥が飯盒の蓋に一杯、これが入坑するときの食事。終えて上がったときはパンなしで、お粥とスープが一杯。腹の中はからっぽで、食堂を出るのに未練たっぷりであった。

二年後に民主運動が始まり、初めは様子を見ていたが、帰国できないかもしれないと次々と講習に参加した。

私たちの藤部隊は戦犯部隊ということで、三度ゲーペーウーの取調べを受けた。帰れないかもしれないと思ひ、その後は積極的に各行事に参加した。三年後、胃病のため二十日間入院し、退院後OKとなり、炊事勤務に回され、パン屋の責任者となって千二百人の人にパンを切つて渡した。ハラゲルの人で私の顔を知らない人はいないと思う。

思えば、落盤で間一髪命を拾い、高圧線に二度も触れ、二度とも気絶していたこと、幾たびか死線を乗り越え、昭和二十五年二月九日、高砂丸にて夢にまで見た祖国舞鶴に上陸した。

再び我が子、我が孫に青春のない時代を送らせたくないことを祈つて。

追伸、平成七年八月三日、テレビ朝日で放送された「淡々たり、淡々たり、奇才の天才画家」の横山操画伯は、同じ中隊で、ハラゲルで一緒に生活し、帰りも一緒であった。

戦後五十年を迎えて

敗戦からシベリア抑留

について

東京都 宮本 清

昭和二十年二月繰り上げ卒業で、樺太庁敷香中学を卒業し、新潟県長岡市にある国立長岡高等工業学校夜

間部に四月入学。その間、叔父のところへ寄宿通学。

その後間もなく八月二日、長岡市がB29の空襲を受けて叔父宅焼失。いる場所なく、八月二日、樺太にいる父母のところへ帰るべく父の実家に行き、わらじ二足、地下タビ一足もらい、着のみ着のまま北海道經由樺太に向け出発。稚内まで順調に行くことができたが、稚内でソ連が参戦したとの情報があり、十日間くらい足どめ。やっと稚泊連絡船に乗船。それも普通の乗船とは違い、体に救命具をつけて乗船。所要時間八時間、大泊に到着。それから約十二時間列車に乗り、やっと母のいる上敷香に八月十四日に到着。一泊して、父のいる豊原市に向かつて八月十五日、上敷香駅より屋根なし貨車に乗り敷香駅に到着。それから、普通ならすぐ発車するが、いつ発車するか不明とのことで貨車の中で待機させられた。

しばらくして、戦争に敗れ降伏の玉音放送があるとの情報があり、待機していると玉音放送が流れてきた。そのとき、これからどう生きていけばいいのか、一瞬頭の中を不安がよぎり、母と義妹と三人で涙を流した。

しばらくすると列車が動き出し、父のいる豊原駅に到着。やっと父と再会することができた。

父は司令部勤務で、戦況不利のため豊原に司令部を移動、武徳館に居を構えていた。父と再会すると、そのまま外出は許可にはならなかった。武徳館の中はまだ降伏したという気持ちはなかった。これから内地にいつ帰るか、そんな気で頭の中が一杯であった。

しばらくしていると、ソ連兵が進駐してきた。そして、中学生以上の男子は内地へ帰還させないとの情報があり、そこで、逃げないで死ぬときは一緒に死をと覚悟して、父と行動を共にした。他の将校の家族は早く帰還し、私たちだけでした。しかし一般の人々、我々の同級生たちのことを思うと、ソ連兵に捕らわれてもよいと覚悟した。

また数日過ぎるとソ連機が飛来、豊原駅付近に爆弾を落としてきた。あまりな非道の繰り返しに義憤を禁じ得なかった。また、婦女子がソ連兵に暴行を受け、タンカに乗せられていく姿を見ている。それから数日後、内地に帰還できるとの情報が入り、ほのかな安ら

ぎを覚えた。

九月二十日豊原を出発、大泊より乗船、ソ連兵はダモイと話をしてくれた。しかし、船は航行中、右に進路を変えたのでおかしいと思っていると、ウラジオストツクの方向に向かっているではないか。不安が頭をよぎった。ソ連は昔から何をやるかわからない国であると教育を受けてきた。船に乗ること二日、不安の中しウラジオに到着。その間は麦だけの食事であった。

そして乗船者は将校（八八師団）だけであった。ウラジオ港に停泊すること二日間、粗末な食事でも通らなかった。

そこへ朝鮮から航行してきた、やはり将校だけの船が横に停泊。乗船している将校に話を聞くと、衣部隊という名の部隊であった。その人たちから乾燥のめんたいを投げてもらい食することができ、心から感謝したことを今でも鮮明に記憶している。それからすぐ下船して、監獄に収容されること一カ月間。食物はジャガイモを収穫した後のこぼれジャガイモを集めてきて食べた。まともな食物は支給されなかったので、低い

段差のあるところも上がれなかった。そして寒さが身にしみて、寒いというより冷たく凍りつくような状態であった。

一カ月間過ぎるとポセットというところに移動。テント生活。それは十二月である。そこでは過酷の生活であった。また一カ月過ぎると、屋根付き貨車に乗せられヨーロッパの方向に向かって走り、その間、バイカル湖付近を通過するころ貨車の中は冷蔵庫になり、食事はまともな食物ではなく、想像を絶する状態であった。そして、イルクーツク↓ノボシピリスクを通過、ウラル山脈を越えてキズネルに到着。その間、所要日数は忘れたが、のろのろ走行であった。

キズネルから厳寒五〇度から六〇度の寒さの中を行軍させられ、やつとタタール自治共和国のエラプガに到着。その間歩行距離八十キロ。凍傷になり両足切断した人や、食事は軍隊用の水飲みカップで一杯くらいしか支給されず、ふらふら状態で眠くなり、眠るとそのまま死が待っている。母と義妹は待遇はよく、ソリに乗せられ収容所に着いた。父と私は徒歩で行軍、極

限状態であつた。今でも凍傷の跡があり、思い出したくありません。

前と後に剣付銃を持ったソ連兵がつき、ああ我々は戦に敗れたのだとくやししく、涙すら出なかつた。死は恐ろしいとは思わなかつた。やっとエラブガに着くと、部屋は家族四人と男の子一人連れた小野寺さんという二家族六人部屋であつた。エラブガにはA、Bラーゲル二收容所があり、我々は最初Bラーゲルであつた。その後Aラーゲル。その收容所での食事は、父と私は黒パンとカーシャ、母と義妹は特別食であつた。私だけは他の軍人と外の作業に従事させられた。その收容所はドイツ、ハンガリー、ルーマニア人と一緒の收容所であつた。

就寝は毛布一枚で、夜は便所が外の遠い所にあり、一晩じゅう眠ることができなかつた、便所の往復で。それから、夜は南京虫が襲つてきた。見るからに寒けがする。寝台は木板で板をはぐとぞろぞろいた。つぶしてかべにつけると地下の営倉に入れられた。エラブガはボルガのほとりにある。

エラブガの生活は二年。しかし悪い思いばかりではなかつた。作業のなかつたときは、今、参議院の板垣正さんからロシア語を覚えてもらった。また大連の工業学校の校長をしておられた山本さんから数学(微分・積分)を、石垣さんから万葉集、横浜国立高等工業学校教授の宮脇さん、今では皆一流の先生に教えていただいたことを鮮明に記憶、感謝しております。相沢会長さんとも一緒のラーゲルに生活したことを記憶しております。雑談になりました。

口時は忘れましたが、エラブガの收容所に帰還の朗報が届き、住みなれたところを後にするのですが、苦しいとき、楽しいとき、悲しいとき、その間腸チフス、マラリアで死亡された方々がたくさんいらつしやいました。そのことを思うと胸がつまります。ラーゲルに着くとすぐ詩をつくられた方がおられます。(詩 遠いあの空眺むれば こいしい故郷思わるる ボルガのほとりに古れし町 ああ知るやエラブガを)今でも記憶しております。

收容所を出て移動してボルガのほとりの船着場で、

名前は忘れましたが、一晩外で毛布を敷いて青空就寝、翌日、遊覧船でボルガ川をカザンに向かって乗船してカザン駅に着く。そこから帰還列車が出発。我々の家族は車両の最後部に乗車したことを記憶している。まだ帰還すると喜んでおりました。しかしハバロフスクに着くと、後部二両が切り離され、前の列車が帰還の途についた。後の二両に我が家族四人とも入っておりました。一瞬悲しくなりました。

それからハバロフスクの第十四分所に収容されました。母、義妹と一緒にいたので個室を与えられました。しかし父と私は、エラプガの作業と比べものにならない過酷な作業で、一日目から建物を建てるため、父と私と普通の軍人がする作業で、背中にレンガを背負い、一日千五百枚を運ばされたことが鮮明によみがえってくる。第十四分所には何日も過ごすことなく、栄養失調、ヘルニアで入院。その病院は名前は記憶していませんが、収容所からかなり遠く離れた病院にトラックで連れていかれたと記憶している。その時の付添人は樺太師団の軍医、吉川少佐殿であつたと記憶しております。

す。

病院で手術が終わり、体調もよくなり退院することになりましたが、その間、手術室に運ばれ、手術のとき暖房はありません。寒かったと記憶。手術台に乗ったとき、もうこの世は終わりだと覚悟をしました。しかし医師の腕、看護婦のやさしさは、日本の医者と看護婦と変わらぬものがありました。退院するとき、また元気で父母、義妹に会えると喜んでおると、収容所に着いたところは第十六分所でした。その収容所は官吏だけの収容所でした。家族に会うことができず、不安でなりません。それから間もなく体調不良で入院。またよくなり退院すると、今度は第二十分所に入院所。

その作業は冬で伐採の作業、分所内の作業、食堂の手伝いなど厳しいものでした。食事はアワ、コウリヤンなどひどい食事でした。第二十分所での収容所に俳優の滝口さん、後に有名女優の岡田嘉子さんとモスクワで結婚した方とご一緒したことを記憶しております。それから第十六分所に移動。この収容所は作業も

食事も一番お粗末で、主に道路工事、貨車に入っている石炭おろし、貨車から百キロの砂糖袋をおろす作業でした。そこでは朝鮮人も一緒でした。

ハバロフスクに生活すること二年。その間、第十四分所で別れて父母、義妹と二度と会うことなく收容所を転々。そして帰還命令を受け、收容所で一人一人、政治部員に呼ばれ調査を受けナホトカに移動。最初の收容所は軍人でなく満州の開拓団の方々の收容所でした。その收容所で帰還団を編制、その小隊長になり、それから第二・第三收容所と移動、高砂丸で舞鶴港に帰還。二日間の検疫の後上陸。收容先の場所、昭和二十四年八月二日、夏でしたので海軍の夏服一着と千円を引揚援護局より支給され、故郷に向け舞鶴駅より北陸本線で帰還の途についた。父の実家の隣村、小川に到着すると、村長初め役場の方々が出迎えに来ていた。おいておりました。

シベリア抑留生活四年は、エラブガの收容所の方々は二年で帰還されましたが、父が司令部の暗号係の責任者であったため、二年多く過酷な労働をハバロフス

クでさせられ、食事は家畜が食べるものでした。米飯、魚、野菜は支給されず、麦、黒パン、マトン肉の毎日でした。

休日は木でつくった麻雀、将棋、碁、演劇などで過ごしましたが、暖房などあるはずがなく劣悪な状況でした。飢えと寒さと重労働をさせられる中で、自分で耐えるしかありませんでした。極限すれすれの死の淵に立たされた毎日でした。その故、栄養失調、凍傷になりました。帰還後も栄養失調でしばらく生業につけませんでした。

家族は帰還は別々でした。

しかし戦後五十年が過ぎ、その極限状況を体験したことが如何なる困難にも耐えることを知り、私は父に感謝しています。歴史教育をもっと正しく理解し、教育者が子供たちにうその教育をしないよう願ってやみません。

終わりに、シベリアの凍土で亡くなられた方々のご冥福を祈り、筆をおきます。